

師走(しわす)、春待月(はるまちづき)、三冬月(みふゆづき)、12月の別名です。

迎える睦月1月15日(土)にはふおんて寄席の新春特選会を開催します。

そこで『寄席入門』の第2弾をお届けします。

7月に続き、ふおんて寄席の制作協力をお願いしている影向舎より寄稿いただきました。



## 寄席の発祥

寄席という名称の由来は、「人を寄せる場所」という説や、当時は夜だけ演じられたところから「夜席」から転化したのではないかという説が有力です。

寛政3年(1791年)に岡本万作(おかもと・まんさく)という人物が、大坂から江戸へ来て、夜興行をしたのが落語の寄席の始まりと考えられます。その時は駕籠屋(かごや)※1の二階が席として設けられ、それ以来、江戸の寄席は二階席が多かったといわれます。

## 出演構成

寄席のほとんどは、十日間ずつ出演者の顔ぶれが変わります。一日から十日までを「上席(かみせき)」、十一日から二十日までを「中席(なかせき)」、二十一日から末日までを「下席(しもせき)」といい、特に1月の上席を「初席(はつせき)」と呼びます。



## 寄席の一日

進行役を務める前座がまず「一番太鼓」を叩き寄席の開場を告げます。この太鼓は「ドン、ドン、ドーンとコイ！」と大太鼓だけでゆっくりと打ちます。打ち始める前に、太鼓の周りを、バチでカラカラと音を立てて回すのは、寄席の木戸を開ける音を象徴しています。ちなみに開演直前に打たれるのが「二番太鼓」。大太鼓・シメ太鼓・笛によって、「オタフク(お多福) コイコイ」と演奏されます。終演後の追い出し太鼓は、「デテケ(出てけ)、デテケ」と叩きます。

お客様はテケツ※2(切符売り場)で買った入場券を、スタッフにモグって(半券をちぎって)もらい、客席へ入ります。ホール客席と違い、寄席の客席は飲食自由。いつ来て、いつ帰っても構いません。

開口一番は、「幕開けの一席を前座(ぜんざ)がつとめる」という意味で、一番最初に前座さんのお客様のご様子を伺います。前座の次は二ツ目が登場。二番手だからその名がついたと言われています。

修行中の前座は着流しですが、二ツ目になると一人前扱いで、羽織の着用を許されます。落語家が高座の上で羽織を脱ぐタイミングは、まくらから本編へ切り替わる時が一般的ですが、最後まで脱がない演者もいます。

三番目からは真打(しんうち)と色物(いろもの)(落語以外の演芸)が入れ替わり立ち代り高座にあがります。落語が二本続いた後に、必ず色物が一本入るのは、同種の芸ばかり聴いて疲れにくいという配慮です。芸人の入れ替わりの際には必ず前座が出てきて、座布団をひっくり返し(高座返し)、出演者の芸名が書かれた「めくり」を変えます。またプログラムの初めのほうを「浅い出番」、あとになるほど「深い出番」といいます。

それぞれの落語家が高座にかけるネタ(演目)は、事前ネタを決めて告知をしている会でない限り、一般的には、その日のお客様の様子に合わせてその場で決めます。お客様が同じ嘸(はなし)や似た嘸を聴いてしまわないよう、楽屋にはその日演じられたネタを記録する「ネタ帳(ねたちょう)」というものが有り、落語家は、その内容を見てから高座に上がります。

番組の半ばすぎあたりで休憩時間(お仲入り(おなかいり))となりますが、その休憩のすぐ前の出番を「仲入り前」または「仲トリ」と称し、力量のある芸人がみっちり演じます。仲入り後の最初は「くいつき」といわれ、休

憩後の座のざわつきをしずめ、観客の注意を高座に引き戻します。

寄席のプログラムは西洋料理のフルコースと同じように、多彩な料理(演芸)で盛り上げていき、次第にメイン料理(トリの真打)への期待を高めていきます。トリの一つ前の「ひざがわり」は色物芸人の腕の見せ所。場内の気分転換や時間調整をして、トリの落語を聴く態勢を整えます。そしてお目当てのトリの真打が高座に上がる。「待ってました!」「たっぷり!」の声を受けながら、トリの演者が大ネタで締めくくります。

暇つぶしにふらっと入るのか、トリの師匠を目当てにがっつりと最初から最後まで聴き続けるのか、寄席をどのように楽しむかはお客様次第。ふおんて寄席でお目当てを見つけたら、今度は寄席に行ってみるのも面白いかも知れません。

※1 駕籠屋：人を乗せる駕籠かきが待機する場所、駕籠かきを取りまとめている商売

※2 劇場や相撲場が直接入場券を売る切符制度を採用したのは、1911年3月に開場した東京の帝国劇場にはじまる。その切符は英語のticketをなまって「テケツ」と呼ばれるようになった。